



No.51 Dec.2013



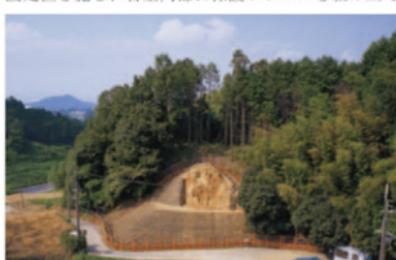
■ キトラ古墳との30年

2013年10月4日、キトラ古墳石室の盗掘孔が、新たに作製した石製の蓋で閉じられました。これにより、壁画の発見から30年の時を経て、古墳は再び眠りにつくこととなります。

キトラ古墳の最も大きな特徴は、高松塚古墳と同様に、大陸風の極彩色の壁画です。壁画は漆喰が壁から浮いている等、危険な状態にあったため、取り外して保存処理をおこないました。2001年に同じ機構として統合された、東京文化財研究所との共同作業です。現在は、すべての漆喰の取り外しが完了し、保存処理を進めています。

また、新たな壁画の記録手法として、高精度な写真を撮影し、それをつなぎ合わせたフォトマップを作成しました。これは実際の壁画と誤差がほとんどありません。

キトラ古墳の発掘調査は、文化庁の委託による奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の共同調査でした。通常の発掘とは全く異なり、石室内の環境を保持するための仮設覆屋内の作業です。石室内部を何度も確認することにより、壁画や床面の堆積土の状況が手に取るようになります。万全の準備が可能でした。発掘中に誤って壁画に触れては一大事です。あらかじめ壁画に保護処置を施し、石室内部に保護フレームを組み立て



奈文研による最初の発掘調査（2002年）

ました。担当者の言葉を借りれば、「鳥かご」内の発掘です。石室の実物大模型の中で、組み立ての練習をしていた姿が思い起こされます。

石室内の堆積土は、小型のコンテナにそのまま入れて持ち帰り、奈文研で慎重な調査をしました。石室内は盗掘を受けていたとはいえ、木棺の飾り金具、大刀、玉類等、少なからぬ遺物が出土しました。そのなかで、直径1~2mmの微細なガラス玉はコンテナごとX線写真撮影をして所在を確認し、取り上げたものです。これまでの調査では見過ごしていたような微細な遺物で、慎重な調査の成果を示す遺物の一つです。

壁画の発見当初は、すべてがまったく手探りの状況でしたが、壁画が無事保護でき、遺跡も整備活用に向かっていくことになった過程は、一連のドラマを見るようでした。30年間の技術や機材の進歩がそれを可能にした面があるでしょうが、多くの人々の努力があったことを忘れてはいけません。その中で、同時期に進行した高松塚古墳の調査とともに、奈文研は中心的な役割を果たし、実力を遺憾なく發揮したと言えるでしょう。来年からは整備が進み、そこでも奈文研は大きな役割を果たすことが期待されています。今後とも各分野の専門家が協力あって、文化財を保護する様々な活動に取り組んでいきたいと思います。

(都城発掘調査部副部長 玉田 芳英)



石室の閉塞（2013年）



発掘調査の概要

甘樺丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第177次）

甘樺丘は飛鳥川の西岸に位置する丘陵で、「日本書紀」には、皇極天皇3年(644)に蘇我蝦夷・入鹿の邸宅が營まれたことが記されています。

丘陵東麓の谷におけるこれまでの調査で、7世紀前半から8世紀初頭にかけて、大規模な造成をともなう活発な土地利用がおこなわれていたことが判明しています。今回の調査は、これまでの調査地より北に位置する小さな谷と、その西側の斜面と尾根の上でおこないました。斜面と尾根上の調査区では遺構は確認されませんでしたが、谷部では古代の遺構を確認しました。調査は2012年12月に開始し、途中2か月間の中斷を経て、2013年11月に終了しました。

調査の結果、谷は本来北西から南東に傾斜する地形でしたが、高いところは地面を削り、低い部分は埋め立てて広い平坦面を造るという大規模な土地造成をおこなっていたことがわかりました。そして、平坦面に掘立柱建物や、溝等を造っていました。これらの具体的な利用方法はわかりませんが、数回の遺構変遷が確認できました。谷を埋め立てた土に含まれる遺物と、廃絶後に遺構全体を覆う土に含まれる遺物が、いずれも7世紀中頃までのものであることから、この谷は7世紀中頃の短い期間のみ使用されていたとみられます。

また、このような小さな谷でも大がかりな土地造成をおこなっていたことから、これまでの調査とあわせ、甘樺丘では7世紀代に広い範囲で土地開発がなされていた可能性が高まりました。今後、甘樺丘の造成の全体像があきらかになることが期待されます。

（都城発掘調査部 大林 調）



調査区全景（北東から）

藤原京右京七条一坊の調査（飛鳥藤原第178-2次）

大和野平では、農業用水利施設（吉野川分水）の整備をおこなうことで、農業用水の安定供給と適正利用を図る大和紀伊平野農業水利事業が実施されています。今回の調査は、その事業の一環である、大和野平支線水路の改修工事にともなうものです。

調査地は、藤原宮の南に接する藤原京右京七条一坊という一等地あたり、調査期間は2013年8月5日から9月13日までです。過去の調査成果から、調査区内には、西一坊大路と六条大路の道路側溝がとおると推測できましたが、調査区は東西の幅約1.5m、南北の長さ約110mという非常に狭く細長い形で、果たして想定どおり道路側溝が見つかるかどうか、わかりませんでした。

調査の結果、調査区中央付近で、東西溝を検出しました。その位置関係から、六条大路の南側溝である可能性が高い溝です。

また、調査区北側では、東西溝を2条、南北溝を1条検出しました。東西溝は、2条のうちのどちらかが、六条大路の北側溝であると考えられます。南北溝は、北でやや東にふれる直線的にのびる溝で、南北30mにわたり確認できました。検出位置は、西一坊大路東側溝の想定位置とはほぼ一致しています。このことから、この南北溝は、西一坊大路東側溝の可能性が高いと考えています。

今回の調査区は、幅が狭く、更に遺構面は、近現代の搅乱により多くの削平を受けしていました。そのような中でも、六条大路と西一坊大路の道路側溝と考えられる遺構を確認することができました。小規模な調査でも、藤原京の構造を理解する上で重要な成果が得られたことを嬉しく思います。

（都城発掘調査部 若杉 智宏）



調査区北側の窓掘状況（南から、後方は耳成山）

興福寺西室の調査（平城第516次）

興福寺は中金堂と講堂の東・西・北をコの字型に取り囲む三面僧房を有しております、西僧房は「西室」と呼ばれています。各僧房の外側には「小子房」と呼ばれる建物が並行して建てられていました。西室は720年代に建立されましたが、8度火災に遭い、享保2年(1717)の焼失以後、再建されることはありませんでした。また、西面の小子房は西室より早く廃絶したとみられます。今回の発掘調査は、興福寺が進めている「興福寺境内整備基本構想」にもとづいて、西室の南半分を対象とするもので、調査面積は985m²、調査期間は2013年6月3日から10月11日までです。

調査の結果、西室の礎石および礎石据付穴・抜取穴、基壇外装等を確認しました。礎石は大きさが1m前後の安山岩の自然石で、8石が創建当初の位置を保っていました。7度の再建の際に、創建建物の位置・規模を踏襲していたことがわかります。また、桁行の各柱間に2基ずつ、間柱または床東とみられる小型の礎石および礎石据付穴・抜取穴を確認しています。

調査区内では、西室のうち桁行7間×梁行3間分を検出しました。建物規模を復元すると、南北約62.7m、東西約11.8m、桁行10間×梁行4間、柱間寸法は桁行の南端2間が約16尺、以北が約22.5尺等間、梁行は約10尺等間になります。「興福寺流記」等の資料から桁行11間に復元されてきた従来の復元案

とは異なる柱割であることがあきらかになりました。

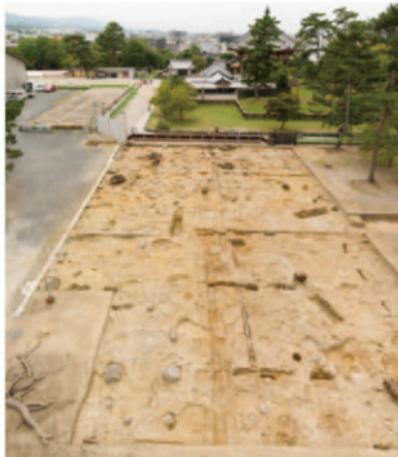
調査区南東の拡張区では、西室の基壇外装と雨落溝を確認しました。基壇外装は凝灰岩製で、地覆石と羽目石が残存します。これにより、基壇の南東隅が確定しました。建物から基壇の端までは、南面で2.1mです。東面は地覆石の外側が削られていましたが、2.2mに復元できます。また、基壇の高さは約45cmに復元できます。

西室の西側では、大型の南北棟掘立柱建物を検出しました。桁行7間以上、梁行2間で、桁行の各柱間に2基ずつ、間柱または床東とみられる小型の掘立柱穴を確認しました。この建物は、柱筋を西室と揃えており、小子房の可能性が指摘できます。

しかし、いくつかの問題点もあります。礎石建物の僧房に掘立柱建物の小子房が併存するのかということ、小子房の間柱と想定される柱穴の大きさ、形、深さが不揃いであること、西室と掘立柱建物の間が約2.5mしか離れておらず軒がぶつかってしまうことです。更に、西室と小子房が描かれる中世の絵画資料と今回検出した遺構とは様子が異なっていることも問題です。

今回の調査では、西室の礎石や基壇外装を確認し、西室の様相があきらかになりました。いっぽう、小子房についてはまだ検討すべき課題が多いといえます。興福寺をはじめとする古代寺院僧房や、興福寺諸資料の調査の進展がまたれます。

(都城発掘調査部 番光)



調査区全景(北から)

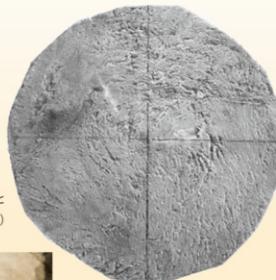


西室基壇外装(南西から)

法華寺旧境内出土の柱根と礎板

昨年と今年の春におこなわれた法華寺旧境内の調査では、数多くの柱根や礎板が出土しました(写真右頁)。出土した部材は、鐵素や紫外線が遮断された地中でよく保存され、柱根は大きいもので直径約40cm、長さ約130cmにおよびます。その柱根の下方には手斧による丁寧な加工痕が観察でき(写真左頁上)。底面には加工時の墨付けがみられます(同下)。よく見ると、十字線の左端と加工位置が微妙にずれています。礎板には厚みが薄いものと厚いものがありますが、ほぞ穴が見られるものもあり、何らかの部材を転用したものと考えられます。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



柱根にこされた加工痕跡(上)と
加工時の墨付(右の赤外線写真)



今年の調査で見つかった据立柱。
約130cm分が残存していた。





ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業

ベトナムの首都、ハノイ市の中心地で、大規模な皇城の遺構が発掘されました。タンロン皇城遺跡です。この遺跡からは建物に使われた木材が大量に出土しています。これを機にベトナム国内ではベトナム林業大学を中心とした出土木製品の調査とその保存にかんする研究が始められました。東南アジアに生育している樹木は日本のような温帯に生育するものとはその性質が全く異なります。非常に重たくて硬い高密度材や、乾燥によって割れやねじれを起こしやすい木材があります。これまで東南アジアでは出土木製品の調査や保存についての研究はあまりおこなわれてきませんでした。

日本ユネスコ信託基金によるタンロン・ハノイ文化遺産群の保存整備事業(2010~2013年)をきっかけに、ベトナム側から、ベトナム産出土木製品の調査と保存にかんする技術協力が強く要請されました。しかし、日本でこれまで広く用いられてきた出土木製品の保存処理方法を、そのまま適用することは困難です。そこで、文化庁からの受託事業として、ベトナム林業大学、奈良文化財研究所および京都大学生生存圏研究所の3者が共同し、ベトナムで出土する木製品の調査と保存処理の技術移転と人材育成を目指した拠点交流事業が始まりました。

この拠点交流事業は、ベトナム出土木材樹種同定に係る共同実験、出土木製品にかんする保存処理方法の検討、およびベトナム全土から出土した木製品調査の実施と国際研究会の開催の3つの項目からなります。熱帯の出土木製造物の保存処理法の確立という世界的な課題にむけての最初の一歩といえるでしょう。

(埋蔵文化財センター 高妻 洋成／企画調整部 田代 亜紀子)



タンロン皇城遺跡の煉瓦積みと木柱列遺構



復興事業とともに貝塚の発掘調査に対する支援

現在、東日本大震災の被災地では、復興事業にともなう発掘調査が数多くおこなわれています。そして、津波の被害を受けた沿岸部には、縄文時代の貝塚が埋没している可能性があります。貝塚には、土器や石器等の遺物とともに、貝殻に含まれるカルシウムの影響によって通常の遺跡では残りにくい人骨や動物骨、骨角器が保存されており、過去の人々の暮らしを知る上で非常に多くの情報を与えてくれます。したがって、やむを得ず貝塚を発掘する場合には、円滑な復興と埋蔵文化財保護の両立を図るためにも、迅速かつ効率的な調査をおこなうことが重要な課題となります。

例えば、宮城県気仙沼市の波怒棄館遺跡では、高台への集落移転(防災集団移転促進事業)にともなう発掘調査によって、保存状態の良好な縄文時代前期の貝塚が見つかりました。迅速な発掘調査を実施するため、奈良文化財研究所では現地に職員を派遣して、宮城県や気仙沼市の職員や全国からの派遣職員の皆さんとともに、効率的に調査が進められるように作業をおこないました。

また、この発掘調査には多くの地元の方々が作業員として参加されていました。初めて貝塚の発掘調査に参加された方が多かったので、発掘する際の留意点を伝えるとともに、今回の調査であきらかとなる成果についても説明しました。地元や全国の皆さんのご尽力によって、波怒棄館遺跡の発掘調査は限られた期限の中で無事に終了しています。今後は奈文研において、波怒棄館遺跡から出土した膨大な動物骨や貝殻を分析して、縄文時代の人々の暮らしぶりをあきらかにしていきます。

(埋蔵文化財センター 山崎 健)



波怒棄館遺跡での説明の様子

東京講演会を開催

平城遷都1300年を記念して、2010年から始めた東京講演会も今年で5回目となりました。奈良文化財研究所は、考古学や文献史学、建築史、造園学、年輪年代学、環境考古学、保存修復科学、文化的景観等、多彩な分野の研究者が文化財の宝庫である奈良の地で、実物に即した文化財の総合的・学際的研究に取り組んでいます。この東京講演会は、そうした奈文研の日頃の活動や調査・研究の成果を広く紹介するための企画で、毎回切り口を変えて、文化財研究の魅力や面白さ、課題等をお伝えしています。

今回の東京講演会は、9月22日、有楽町朝日ホールにおいて「〈歴史の証人〉木簡を究める」と題して開催しました。

1961年に平城宮跡で最初の木簡が発見されてから半世紀が経過し、現在、全国から出土した木簡の総数は38万点を越えるほどになり、特に資料の絶対数が少ない日本古代史の研究にとって、今や木簡はなくてはならないものとなっています。

そこで、歴史資料としての木簡そのものに焦点をあて、6人の奈文研の研究者が「木簡を掘る」、「木簡を探る」、「木簡を読む」、「木簡を広げる」、「木簡と文字」、「木簡を伝える」として、その発掘から整理・研究の実状、木簡の保存方法等、奈文研が半世紀にわたって培ってきた木簡研究のノウハウを多角的に紹介しました。その後、「木簡研究の過去・現在・未来」として、講演者に外部の2人の専門家を加え、パネルディスカッションをおこない、会場から多くの質問があり、大変盛況のうちに終了しました。

当日は、400人を越える方が来場され、演者の話を時にメモを取りながら、熱心に聴き入っていました。

(研究支援推進部 田中 康成)



講演会風景（東京会場）

移転について(現庁舎から安全な仮設庁舎へ)

奈良文化財研究所は2012年に創立60年の還暦を迎えた、同時に本庁舎建替事業をスタートさせました。

奈文研の庁舎の歴史としては、1953年に奈良市春日野町の旧奈良県商工館（現奈良国立博物館仏教美術資料研究センター）を最初の庁舎として開所し、その後、1980年に旧県立奈良病院を改修した現在の庁舎に移転してきました。

現在進めている本庁舎建替事業は、平城宮跡内の佐伯門東側に仮設庁舎を設置することから始まり、本年12月には本庁舎と研修棟の機能を移転させ、新庁舎が完成する2016年春までの約2年間は仮設庁舎での研究活動等の業務をおこなうこととなります。

仮設庁舎は現庁舎と比較すると面積が減少しますが、病院特有の広い共有スペースを減らすこと等により研究室は現在とほぼ同じ面積が確保されています。また、研究室はもともと病室であったため、電源等の面で機能不足が多數ありましたが、仮設庁舎では研究業務を考慮した設計になっています。更に、見かけはプレハブですが安全性（耐震機能）は現庁舎以上であり、仮設庁舎の方が安全な建物といえます。

なお、庁舎移転については、奈文研ホームページ (<http://www.nabunken.go.jp>) でもご案内しております。一般の方々には、図書資料の閲覧等についてしばらくの間ご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

(研究支援推進部 今西 康益)



建設中の仮設庁舎

飛鳥資料館 「発見30周年記念 キトラ古墳壁画特別公開」

2014年1月に、飛鳥資料館ではキトラ古墳壁画の発見30周年を記念して、キトラ古墳壁画の「白虎」と「玄武」を10日間に限って特別公開いたします。飛鳥資料館では2010年の「四神」の公開以来、久々にキトラ古墳壁画を公開します。もちろん「白虎」と「玄武」には多くの注目が集まりますが、今回は壁画のみならず、調査や壁画の取り外し作業で重要な役割を果たした器具類も同時に公開を予定しており、30年の歴史をわかりやすく振り返られるような展示になればと思っています。学芸室も、キトラ古墳壁画の公開に向けて全力で準備を進めています。どうぞご期待ください。

(飛鳥資料館 成田 勝)



会 期：2014年1月17日（金）～26日（日）

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）会期無休

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎0744-54-3561（飛鳥資料館）



平城宮跡資料館「来年の干支は…どこにいる？」

来年の干支は「馬」。新春早々の資料館で、馬にまつわる出土品を探してみてはいかがでしょうか？馬といえば、皆さんおなじみの土馬（写真）や馬形はもちろんのこと、馬の墨画イラストや木簡などさまざま。

「馬」の文字が書かれた木簡は、木簡の研究室コーナーに3点もあります。奈良時代の人々にとって、馬が身近な存在だった証拠でしょう。

そして面白いのは、隼人の楯。先端にあけられた小さな穴は「馬の毛」をつけるためのものとされています。

(企画調整部 渡邊 淳子)

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

休 館 日：月曜 ※年末・年始12/29(日)～1/3(金)は休館します

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/heijo/museum>

お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）



■ お知らせ

飛鳥資料館

2014年1月17日（金）～26日（日）

「発見30周年記念 キトラ古墳壁画特別公開」

飛鳥資料館 冬季企画展

2014年2月14日（金）～3月16日（日）

「飛鳥の考古学2013」

■ 記録

文化財担当者研修

○三次元計測課程

8名

2013年9月30日～10月4日

○保存科学基礎I（金属製造物）課程

11名

2013年10月8日～17日

○保存科学基礎II（木製造物）課程

15名

2013年10月17日～25日

○古代中世瓦調査課程

14名

2013年10月28日～11月1日

現地説明会

○飛鳥藤原第179次発掘調査（藤原宮朝堂院朝庭）

337名

2013年12月21日

○平城第516次発掘調査（興福寺西室）

885名

2013年9月28日

飛鳥資料館 秋期特別展

2013年10月18日～12月1日

9,132名

「飛鳥・藤原京への道」

平城宮跡資料館 秋期特別展

2013年10月19日～12月1日

「地下の正倉院展—木簡学ことはじめ」

「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」

16,753名

飛鳥資料館 写真コンテスト

2013年9月7日～10月6日

第4回写真コンテスト「飛鳥川の導」

3,359名

第113回公開講演会

2013年10月26日

176名

■ 最近の本

○『遺跡をさぐり、しらべ、いかす』

—奈文研60年の軌跡と展望—

（株）クバプロ 2013年9月

○『日中韓 古代都城文化の潮流』

—奈文研六〇年 都城の発掘と国際共同研究—

（株）クバプロ 2013年12月

○『塩の生産・流通と官衙・集落』

（株）クバプロ 2013年12月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2013年12月